

対話における省略の復元のストラテジー

堀 口 純 子

1. はじめに

対話において話し手が構文法的な構成要素を省略するのは、頻繁に見られる現象である。一方、対話というのは聞き手がいて初めて成り立つものであるから、話し手の省略は聞き手に理解できるものでなければならない。

言いかえれば、話し手がある要素を省略するのは、それを省略しても聞き手には分かるはずだと判断したからである。例えば、水泳帽をかぶらなければいけないプールで帽子をかぶっていない人に監視員が、

(1) A: 帽子。

と言ったとする。この場合、監視員には少なくとも次の2つの前提がある。

① このプールでは水泳帽をかぶらなければいけない。

② 今プールにいるあなたは水泳帽をかぶっていない。

前提であることはわざわざ言う必要はないので、

(2) A: 帽子をかぶってください。

と言えば十分なのだが、さらに焦点である帽子だけを取り上げても相手には通じるはずだと監視員Aは判断して、(1)のように言ったと考えられる。

しかし、省略されて言語化されていない要素まで読み取って話し手の発話を理解するのは、聞き手の役割である。例えば、上の①②の前提で言われた例文(1)に対して、聞き手から次の(2)~(5)のような反応が返ってきたとする。

(2) B: あっ、すみません。すぐかぶります。

(3) B: 持ってますよ。

(4) B: えっ、かぶるんですか。

(5) B: えっ、帽子って？

(2)は、「帽子」と言われただけで前提①②をすぐに想起し、だから「帽子をかぶる」ように言われているのだということが理解できた聞き手の反応である。すなわち、話し手の省略を聞き手が正しく復元できたわけである。(3)は、前提の①がない、または①の解釈が違っている聞き手の反応である。例えば、泳

ぐ時はかぶらなければいけないがプールサイドではかぶらなくてもいいとBが考えているなら、「帽子」と言われて「帽子を持ってきてください」という意味に理解する可能性もある。その時手に持っているビーチバッグの中に帽子が入っているとすれば、(3)のような反応になるかもしれない。(4)は、前提の①がない聞き手の反応である。前提の①を知らないのに、それが省略されたために、(1)の意味が十分に理解できなかったのである。しかし、「帽子」と言われてすぐに自分が帽子をかぶっていないことを想起し、「帽子をかぶる」ように言われているのではないかと理解したのだろう。ただ、このプールの規則は知らないため、自分の理解が正しいかどうか確信できず確かめているのだろう。(5)は、「帽子」と言われただけでは何のことか全く理解できない聞き手の反応である。

このように、省略されて言語化されていない部分は、聞き手が何かを手がかりに復元しなければならぬのである。実際、聞き手は、語彙や文法やイントネーションといった言語的なものや、聞き手の話し手に関する知識や情報、聞き手と話し手との関係、聞き手と話し手との了解事項の有無、話し手の声の調子や表情や身振り、話の内容に関する知識、常識、場面、文脈などの中のいくつかの要素を手がかりとして、省略を予測したり推測したりしながら復元して、話し手の省略のある発話を理解している。

このことをもう少し例で見よう。

(6) A: 映画おもしろかった?

B: ぜんぜん。

A: そう。

この例では、Bは「おもしろくなかった」ということは言わなくてもAには分かるはずだと考えて省略したのだろう。Aは「ぜんぜん」という語やBの口調などを手がかりにすれば、省略されたものを復元しながらBの発話を理解することができるだろう。

(7) A: あしたは筑波山へ行こうよ。

B: 雨が降ったら?

A: そしたら、映画にしようか。

(8) A: あしたは筑波山へ行こうよ。

B: 雨が降っても?

A: うん。雨の筑波山もいいよ。

Bは、(7)では「どうするか」という意味のことを、(8)では「行くか」と

いう意味のことを、それぞれ言わなくてもAには分かるはずだと考えて省略したのだろう。Aは、(7)では「たら」を(8)では「ても」を手がかりにすれば、省略された要素を復元しながらBの発話を理解することができるだろう。

(9) A: 相談したいことがあるんですけど、今いいですか。

B: 今はちょっと。

A: あ、そうですか。じゃ、またあとでうかがいます。

この例では、Bは「都合が悪い」という意味のことは言わなくてもAには分かるはずだと考えて省略し、Aはそれを復元して理解したのだろう。

(10) お先に。

この例では、話し手が職場から外の仕事先へ出かける時であれば「行きます」、職場から家へ帰る時であれば「帰ります」、大皿に盛られた料理を話し手が先に取りろうとしているのであれば「いただきます」、料理を取った後であれば「いただきました」というように、聞き手は場面に応じて省略された要素を復元しながら理解する。

このように、聞き手は言語的あるいは非言語的な手がかりによって省略を復元しながら話し手の発話を理解していく。しかし、聞き手による省略部の復元は必ずしもいつもうまくいくとは限らない。(3)の例のように話し手が省略した要素と聞き手が予測して復元した要素が一致しないこともある。また、話し手は聞き手にも分かるはずだと考えて省略しても、(5)の例のように聞き手にはそれが分からなくて復元できないということもある。

話し手の省略は、聞き手がそれを復元して理解してくれるからこそ可能なのであるから、聞き手による復元がうまくいくかどうかということと、どのように復元するかということが、対話の発展や展開にも影響を与えることになる。本稿では、このような点に着目して話し手の省略を聞き手の側からとらえ、聞き手がどのようなストラテジーによって話し手の省略を復元しているかということを見ていきたい。

2. 省略要素を表出しない復元

聞き手は話し手がある要素を省略すると、それを復元しながら話し手の発話を理解するわけであるが、その復元した要素を言語形式で表出する場合と表出しない場合がある。ここでは、表出しない、すなわち復元を聞き手の頭の中で

けで行う例を見ることにする。

(11) A: ダンロップは高いからブリジストンにしようよ。

B: そうだね。

(11)は同じテニスクラブに所属しているAとBのやりとりである。話し手Aは「ボール」と言わなくてもBには分かるはずだと判断して省略しているのだが、Bはそれを頭の中で復元した上でAの発話を理解し、それに対して「そうだね」と反応している。

(12) A: ダンロップは高いからブリジストンにしようよ。

B: 高くないよ。

A: ボールだよ。

B: あ、ボールか。ラケットかと思ったよ。

(12)では、話し手Aが省略したのは「ボール」なのに、聞き手Bが復元したのは「ラケット」だったために、BはAの発話を違う意味に理解し、その理解に基づいて反応している。「高くないよ」というBの反応から、AはBが省略を正しく復元できなかったと判断して、次に「ボールだよ」と省略した要素を伝えているのである。このように聞き手の反応は聞き手の頭の中で行われた復元に基づいているので、その反応によって話し手は聞き手の復元が正しく行われたかどうかを判断することができる。

復元が正しく行われている例をもう少し見てみよう。

(13) A: 清原君、今よく振れてますよねえ。

B: そうですねえ。 (プロ野球)

(14) A: あわやホームランかと思いましたが、よくとりましたねえ。

B: ほんとですねえ。 (プロ野球)

(15) A: 去年は夏がなかったから。

B: そう。 (徹子1)

(13)では「バットが」が、(14)では「打ったボールが」と「そのボールを」が省略されている。これは野球放送で話している2人なので、「振る」と言えばバット、「ホームラン」とか「とる」と言えばボールということは、言わなくても分かる話し手は考えて省略したのだろう。また、(15)では毎年正月と夏に撮影をしている映画が話題になっているので、「撮影」は言わなくても分かるはずだと判断して省略したのだろう。

(13)～(15)で省略された要素は聞き手にとっても分かりきったことで、わざわざ言って確認するほどのことでもないのに、復元は頭の中だけですませている

るのだろう。頭の中で復元した要素を話し手の発話に補って理解した上で、聞き手は反応を表出する。このように、話し手にとっても聞き手にとっても自明のことは、話し手は省略し、聞き手は頭の中で復元するというように、言語形式では表出しないで対話を進めていくことができるのである。

(16) A: お父さんはたばこは?

B: あの、吸ってません。

(教育2)

(17) A: 都会の中で山の中の鳥を繁殖させようと思ったら、あの、食べる虫が

B: そうなんですよねえ。

(仲間)

(18) A: アトムってうお名前も本当におもしろいんですけども、これは、あの、最初おつけになったときは

B: これはねえ、

(徹子1)

(16)ではBの子供の喫煙が話題なので、このように省略があっても聞き手は復元することができ、それをもとにして応答している。(17)(18)は省略されている要素を特定することは難しいが、聞き手がきちんと反応しているということは、聞き手には省略部分が予測できたということであろう。

(19) A: 人工芝でまず練習してからゲレンデに出て行けばでこぼこもうまくこなせるんじゃないかと

B: そうですねえ。

(スポーツ)

(20) A: やはり、あの、カウンセリングとかはさがしてでも

B: それがいいと思います。

(教育1)

(21) A: 細かい点にあまりうるさく言わないようになさっては

B: はい。

(教育1)

(19)は「思う」、(20)は「行ったほうがいいのか」、(21)は「いかが」という意味の表現形式が続くと考えられるが、聞き手はその部分を頭の中で予測した上で、反応を示している。

文末に省略がある場合、話し手はこの先に言うはずのことを言わない、それを聞き手が頭の中で復元して反応を表出するという過程を通る。これは、聞き手の先取り相づちが通る過程と同じである。先取り相づちというのは、話し手はまだ発話を続けるだろうと思われるのに、聞き手がその部分を先に予測して、反応してしまうというものである。⁽¹⁾異なる点は、話し手が省略して話順を聞き手にゆずろうと思ったのか、まだ話すつもりなのに聞き手に話順を取られてしまったのかということである。ただ、本当に話し手が省略するつもりだっ

たのかどうかということは、イントネーションやポーズなどで予測はつくものの、確定することは難しい。したがって、先取り相づちというのは、話し手の省略を聞き手が復元するストラテジーの1つと考えることもできるだろう。

以上の例で見てきたように、話し手の省略した要素を復元しながら話し手の発話を理解するとき、聞き手はそれを言語形式で表出しないで、頭の中だけで行うというストラテジーを用いることがある。聞き手の頭の中で行われるということは、復元した要素が話し手には伝わらないということであるが、次の聞き手の反応によって正しく復元されていたかどうかを話し手は判断することができる。聞き手の反応から、正しく復元されたようだ判断した場合は次の発話に移り、聞き手の復元が違っているようだ判断した場合は話し手は省略した要素をあらためて補う。このようにして、話し手と聞き手はお互いに誤解や不明な点を残さないようにしながら対話を進めていくのである。

対話では、上の(19)~(21)と同じように、「と」「って」「たら」「なら」「けど」「が」「から」「ので」「のに」「て」「し」「ように」「ないで」などで終わらせるとか、「でも」「じゃ」「それで」「だから」「それに」「ただし」「ということは」などだけで後は何も言わないとか、「やっぱり」「まさか」「ぜんぜん」「もちろん」「ちっとも」などの副詞だけしか言わないということは、珍しいことではない。これで対話が成り立つということは、聞き手の復元によるところが大きいと言えよう。

3. 省略要素の補充

聞き手は話し手がある要素を省略すると、それを復元しながら話し手の発話を理解するわけであるが、その復元したものを(22)のように言語化して表出する場合、その復元を補充ということにする。

(22) A: ダンロップは高いからブリジストンにしようよ。

B: 練習用ボール。

A: ダンロップとほとんど変わらないよ。

(22)は同じテニスクラブに所属しているAとBのやりとりである。話し手Aは「練習用ボール」と言わなくても聞き手Bには分かるはずだと考えて省略しているのだが、Bはそれを復元し、さらにそれを言語形式で表出している。Bの補充した要素は、Aの発話に無理なく挿入することも接続することもできる。すなわち、補充によって聞き手Bは話し手Aと一緒に一つの文を完成させ

たとも言える。

(23) A: 僕はね鳥をね、あの、見るよりも、本当は聞く方が好きなんですよね。

B: 声を。

A: 僕はずーっと下むいて仕事してるでしょ。(仲間)

(24) A: ちゃんと教育するんですよ。

B: ひなたちに。

A: 猫がそば来たたらさっと逃げろとかね。(仲間)

(23)(24)は、鳥好きの2人が鳥について話しているところである。鳥の話をしていて「聞く」と言えば鳥の声であり、「教育する」と言えばその対象はひなであることは、言わなくても分かると考えて話し手は省略したのだろう。聞き手もその通りに理解して、言語化したのである。Bが補充した(23)の「声を」も、(24)の「ひなたちに」も、無理なくAの発話に入れたりつなげたりすることができる。すなわち、(22)の場合と同じように、補充によって聞き手Bは話し手Aと一緒に一つの文を完成させたとも言える。

(25) A: 京都は京都だったと思うんですけど、でもお目にかかれませんでした。

B: ちゃんまげゆった人には。

A: いなかったから、ああやっぱりあれは本当の人間じゃないんじゃないかと思って。(徹子2)

(26) A: 結婚したら、あの、お芝居ではもちろんしないでお願いしますけど。

B: 男役。

A: 女の人がショーの中で男装してるってすてきじゃないですか。そういう感じではしたいと思います。(徹子2)

(25)は、Aが時代劇の撮影を見たくて京都へ行ったということを話しているものである。時代劇に出るのはちゃんまげをゆった人だけではないので、Aが省略した要素とBが補充した「ちゃんまげゆった人」とが一致しているかどうかは疑問であるが、Bの補充に対してAが訂正せずに次の発話に移っているので、少なくとも間違っていないのだろう。Bが補充したのはAが省略した要素に含まれる一部、すなわち、Aが省略したのは「時代劇の人」で、Bはそれの一部である「ちゃんまげゆった人」を補充したのだろう。(26)では、Aは今までずっと男役をやってきた人なので、「しない」のは何かということはいわ

なくても分かるとAは考えて省略したのだろう。そして、Bもその通りに補充している。(25)も(26)もBの補充はそのままAの発話に入れたりつなげたりすることができる。

(22)~(26)では、Bの補充に対して、Aは何の反応もせずに次の発話に移っている。ということは、これらの例に見られるBの補充は、特にAからの反応を期待して発したものではないとAが判断したと言える。と同時に、言語化されたBの補充によって、Aは省略した要素をBが正しく復元して理解してくれているということがわかって、安心して次の発話に移れたとも言える。これは、ちょうど対話における相づちの機能と同じである。すなわち、話し手の省略に対する聞き手の補充は、相づちとしての機能を果たしていると言えよう。

(27) A: 鳩は海岸の倉庫の近くとかね。

B: いっぱいいますね。

A: あっちの方がえきがあんですよ。

(仲間)

これも(22)~(26)の例と同様に、言わなくてもBには分かるはずだとAが考えて省略した要素を、その通りにBが補充したと考えられる。ただ、省略部分が文末であるため、本当にAの意図で省略したのかどうかを確定することはできない。Aは「いっぱいいます」と言うつもりだったのに、Bが先にそれを言ってしまった、すなわちBの先取り発話とも考えられる。⁽²⁾

(28) A: やだなあ、親子で。

B: 刑務所。

A: 刑務所はいいんですけどね、一緒に(映画に)出るのが。

(徹子1)

(28)は、Aが息子と一緒に四人の役で映画に出たという話をしているものである。Aが「やだなあ」と言っているのは、親子で刑務所に入る役をやることだと思ったBは「刑務所」と補充した。ところが、これはAが省略したものと違っていたため、次にAの訂正が見られる。このように、聞き手が省略を補充しても、それが話し手が省略した要素と一致しないこともある。

以上の例で見てきたように、話し手の省略した要素を復元しながら話し手の発話を理解するときに、聞き手は自分が復元した要素に自信があればそれを言語化して表出するという補充のストラテジーを用いることがある。話し手が省略した要素を聞き手が補充すると、それによって話し手は聞き手が省略をどのように復元して理解したかを知ることができる。(22)~(27)のように聞き手の

補充が正しければ、話し手は聞き手が省略部分を正しく復元して理解しているということを知った上で次の発話に進むことができる。また、話し手の省略を聞き手が違う要素で復元してしまった場合にそれが表出されなければ、話し手のその発話が聞き手に誤解されたままで対話が先に進む可能性もあるが、(28)のように聞き手が言語化して表出すれば、話し手は次の発話に進む前に聞き手の補充を訂正して、その発話に対する聞き手の理解を正しておくことができる。

ここでは、話し手の省略に対する聞き手の補充の例を見てきたが、補充するということは、省略を復元すると同時に聞き手の理解を話し手に伝えることにもなる。これは対話における相づちや先取りの機能に通じるものである。(22)～(26)や(28)のような文中の省略に対する補充は相づちと、(27)のような文末の省略に対する補充は先取りと、それぞれ同じような機能を果たしていると言える。

4. 省略要素の確認

聞き手は話し手がある要素を省略すると、それを復元しながら話し手の発話を理解するわけであるが、その復元したものが正しいかどうかを話し手に確かめるように復元する場合、その復元を確認ということにする。

(29) A: ダンロップは高いからブリジストンにしようよ。

B: 練習用ボール?

A: うん、練習用。

(30) A: ダンロップは高いからブリジストンにしようよ。

B: 練習用ボールですか。

A: うん、そうだよ。

Aは「練習用ボール」と言わなくてもBには分かるはずだと考えて省略し、Bはそれを復元しながらAの発話を理解するのだが、その復元を言語形式で表出するときに、イントネーションを上昇調にしたり疑問の助詞を付けたりして、確かめるように復元している。したがって、話し手は次の発話に進む前に、聞き手の確認に対して応答しなければならない。これが前節で取り上げた「補充」と異なるところである。

(31) A: 先生方がいろいろ考えてくださったんです。

B: お子さんのこれからをですね。

A: はい, そうなんです。 (教育2)

(32) A: 自転車で20キロ近くあるんです。

B: あの, 通学にですね。

A: はい, そうです。 (教育2)

(33) A: 野球部の先輩といろいろ相談したらしいんです。

B: 部活のことですね。

A: いえ, 勉強のことを。 (教育2)

(31)~(33)は子供のことで相談をしている母親Aと相談を受けている教育評論家Bとのやりとりである。ここまでの文脈から言わなくても分かると考えた要素を話し手Aは省略し, 聞き手Bはそれを復元して確認している。これによって, 聞き手自身が自分の理解を確実にすると同時に, 話し手にも聞き手がきちんと理解して聞いているということが分かる。また, (33)の例に見られるように, 聞き手の復元したものが違っていれば, そこですぐに訂正することができる。このように, 話し手が省略した要素を聞き手が復元しながら確認することは, 分からないことや誤解をそのまま残さずに円滑に対話を進めていくための1つのストラテジーと言えよう。

(31)~(33)の確認は, 同意を求めたり念押しをしたりする「ね」の付いた言語形式になっているが, これは聞き手が復元する要素にかなり確信を持っているということである。この確信の度合が低くなると, 次のような例が見られる。

(34) A: ひとつが50キロぐらいあるわけなんですね。

B: 重さが?

A: ええ, そう。 (波)

(35) A: おんなじ方向に回るわけなんです。

B: 特殊なタービンが?

A: そう, 特殊なタービンが。 (波)

(34)(35)は, 海上保安庁の職員AとアナウンサーBが波力発電について話しているものである。聞き手Bは話し手Aが省略したものを文脈から復元してはいるのだが, 話題に関しては専門家ではないために復元したものに十分な確信が持てず, 正しいかどうか確認しようとしたのだろう。

(36) A: ちっちゃい時はこんなおさげで学校でいちばん長かったぐらい。

B: 髪の毛が?

A: 髪の毛が。 (徹子2)

(36)では、「おさげ」といえば髪の毛のことであり、また「こんな」と言いながら手で髪の毛の長さを示しているので、省略しても聞き手には分かるはずだと話し手は判断したのだろう。ただ、聞き手Bとしては「髪の毛」が省略されたのだろうということは予測できても、話し手Aが現在は短い髪で男役を主にやっている俳優なので、半信半疑というところがありこのような確認をしたのだろう。

(37) A: 予約制でうまく入れるかどうか。

B: 病院に?

A: はい。

B: お子さんが?

A: はい。

(教育3)

(38) A: ダンロップは高いからブリジストンにしようよ。

B: ボールを?

A: うん。

B: 練習用の?

A: うん。

省略される要素は1つとは限らず、言わなくても聞き手には分かるはずだと話し手が判断した要素は、2つでも3つでも省略は可能である。しかし、それを聞き手が確かめたい場合には、(37)(38)のように、次々と省略要素を復元しながら確認することがある。

このように確認する要素が2つ以上ある場合、確認の順序は原則的な省略順序の逆をたどるのが普通である。このことを(37)を例にして考えてみよう。

(39) 予約制で子供がうまく病院に入れるかどうか。

(40) 予約制で()うまく病院に入れるかどうか。

省略がなければ(39)のようになり、1つ省略するとすれば(40)のようになる。したがって、2つの要素が省略された(37)は(41)のかっこの中に示した順序で省略されて表出されたものと考えられる。

(41) 予約制で(1)うまく(2)入れるかどうか。

このような発話を聞いた聞き手は、(37)にあるように、まず2番目に省略された要素を復元してそれを「病院に?」と確認し、次に1番目に省略された要素を復元してそれを「お子さんが?」と確認している。すなわち、省略は重要度の低い情報を表す要素から順に行われ、省略されたものの復元は重要度の高い情報を表す要素から順に行われるとすることができる。

(42) A: ダンロップは高いからブリジストンにしようよ。

B: 練習用ボール?

A: いや、ラケット。

(43) A: 発売前から店の前にたくさん並んでるんですよ。

B: 小学生ですか?

A: そうですね。でも、大人の方もけっこういらっしゃるんですよ。

話し手が省略した要素を聞き手が復元しながら確認したところ、それが話し手が省略したものと一致しないこともある。そのような場合は、(42)のように聞き手の確認に対して訂正をしたり、(43)のように追加したりする。

以上の例で見てきたように、話し手の省略した要素を復元しながら話し手の発話を理解するときに、聞き手は自分が復元した要素が話し手の省略した要素と一致するかどうかを確かめるといふ確認のストラテジーを用いることがある。これは、聞き手の復元した要素に対する確信の度合によって、確認の表現形式やイントネーションに幅があるが、いずれの場合にも聞き手は復元した要素に対する話し手からの反応を期待しているわけである。

話し手が省略した要素を聞き手が確認すると、それによって話し手は聞き手が省略をどのように復元して理解したかを知ることができ、また確認に対する話し手からの反応によって聞き手も自分の復元した要素が正しかったかどうかを知ることができる。このように省略に対するお互いの理解を確実にしていくことによって、対話を誤解なく進めていくことができる。しかし、すべての省略にいちいちこのようなことが行われては、省略の意味がなくなってしまう、ひいては自然なコミュニケーションの流れを阻害することにもなりかねない。したがって、自然な流れを保ちながら、しかも話し手の発話を確実に理解しながら対話を進めていくためには、聞き手がどのように確認のストラテジーを用いるかということが1つのかぎになるとも言えよう。

5. 省略要素の疑問詞化

話し手がある要素を省略するのは、それを省略しても聞き手には分かるはずだ、すなわち、聞き手はそれを復元しながら発話全体を理解してくれるはずだという前提が話し手にあるからである。その前提は、言語的および非言語的な手がかりによって聞き手が予測でき復元できると話し手が判断したものである。しかし、聞き手は話し手と同じ前提には立てないこともある。

例えば、AとBが同じグループに属していて、そのグループであした海に行こうという話が持ち上がっているのだが、Bはちょうど相談の時になくてまだそのことを聞いていないとする。そのような場合、次のようなやりとりが交わされる可能性がある。

(44) A: あしたどうする?

B: 何が?

A: あれっ、聞いてないの?

(45) A: あした行く?

B: どこへ?

A: あれっ、聞いてないの?

(44)(45)では、話し手Aはグループで出かける計画なのだから同じグループのBも当然この計画を知っているはずだという前提で話している。ところが、Bはまだこの計画のことを知らないので、省略要素を復元することができない。そこで、Aが省略した部分をBは疑問詞に置きかえて問い返しているのである。

(46) A: きノウはどうもありがとう。

B: 何でしたっけ?

話し手AはきノウBがしてくれたあることをありがたく思っていて次の日までにまでお礼を言っているのだが、Bにとっては大したことはなかったため、次の日にはもう念頭になかったのだろう。Bの念頭にあるかないかということには配慮せず、ただ自分にとってありがたかったというだけの理由でAは省略してしまったのだが、Bにはその部分を復元することができず、それを疑問詞にして問い返しているのである。

(47) A: どうだった?

B: 何が?

もし、Bが入学試験の合格発表を見に行った子供で、Aがその帰りを待っていた親だとすると、「試験の結果は」とは言わなくても「どうだった?」だけで分かるはずであり、(47)のようなやりとりにはならないだろう。このように、話し手と同じように聞き手にとっても今の関心事であれば話し手がそれを省略しても聞き手は復元して理解することができる。しかし、Aが省略したのが学校で日常的に行われる試験のことだとすれば、Bは(47)のように問い返す可能性がある。Aは自分の関心が試験にあるためにそれを言わなくても分かるはずだと思って省略したのだろうが、Bは試験のほかにも学校ではいろいろな

ことがあり、家に帰った時には試験のことなど念頭にないかもしれない。このような場合には、Aの省略をBは復元することができず、その部分を疑問詞で問い返すことになる。

(48) A: やっと来ましたよ。

B: だれが?

(49) A: やっと来ましたよ。

B: 何が?

A: 返事が。

B: 何の?

(48)(49)も、話し手の関心の範囲と聞き手の関心の範囲が一致していなければ話し手が省略しても聞き手には復元できず、聞き手はその部分を疑問詞で問い返すことになるという例である。

このような例をもう少し見てみよう。

(50) A: 結婚のことはずっと考えてましたけど、でも、ころころ変わるんですよ。

B: 何が変わるんですか。 (徹子2)

(51) A: 皆さんが認めてくださったということなんです。

B: 何を認めたんですか。

A: あの、2年生扱いにしてくださったんです。(教育2)

(44)~(49)は話し手の話す対象が聞き手の念頭にない状態で発話された例だが、(50)(51)はそれぞれAの結婚のこと、Aの子供の進級のことと、話題はBの頭の中にも設定されている状況での発話である。しかし、(50)では話し手Aは心の中のことを話しているので、他人であるBには省略を復元することはできなかったのだろう。また、(51)では話し手Aは進級できなかった子供が2年生扱いにしてもらえたという事実を前提に話しているのだが、最初の「皆さんが認めてくださった」という発話の時点では聞き手Bはまだそのことは聞いていないので、省略を復元することができず、疑問詞を用いて問い返しているのである。

(52) A: 恐竜のたまごは食べられるんですか。

B: だれが?

A: あの、弟が言ってたんですけど。

B: あ、いや、だれが食べるの?

A: 人間。

(子供相談)

(53) A: 学校の先生は親が後押しをしてくださってというお話なんですが、自宅でやるとどうしても、あの、感情的なことが先走りまして。

B: だれがですか。

A: 感情的になるんですよ。

B: どっちがですか。

A: やはり先生がいつもおっしゃるように感情的にね。

B: お母さんですか、子供さんですか。

A: ええ、両方なんです。 (教育2)

この2つは、聞き手の疑問詞を用いた問い返しに話し手が適切に対応できなかった例である。(52)では、話し手Aの省略を復元できなかった聞き手Bがその部分を「だれが」という疑問詞に置きかえて問い返したのに対して、話し手Aはそれを「だれがそう言ったのか」という意味に理解してしまったのである。話し手Aにとっては「人間が」ということは自明のことであるため、それは聞き手Bにとっても自明のことだと判断して省略し、さらに「だれが」と聞かれても自明のことを聞くはずはないと判断して例のような応答をしたのだろう。(53)の例も同様であるが、聞き手Bは「だれが」と問い返しても解答を得られなかったので、次に二者択一を示唆する「どっち」を用いたがそれでもだめで、次には省略されたと予測される要素「お母さん」と「子供さん」を具体的に2つ提示してそこから話し手が選択できるような形で問い返している。

話し手が省略するのは、聞き手にとっても自明のことで省略しても復元できる、と話し手が判断した要素である。しかし、以上の例で見えてきたように、話し手が省略した要素を聞き手には復元できないこともあり、その場合聞き手は省略された部分を疑問詞に置きかえて問い返すというストラテジーを用いることがある。

省略する話し手の側から見ると、聞き手にも分かるはずだからと意識的に判断して行った省略から、話し手自身にとって自明のことであるというだけで聞き手に対する意識的な配慮はしないで行った省略までである。しかし、聞き手の側から見れば、話し手の配慮がどうであろうと、言語的にも非言語的にも手がかりのない省略は復元できないのである。ただ、構文的には「主語が省略された」とか「目的語は何だろうか」などというように、どの要素が省略されたか分かるので、その部分を疑問詞で置きかえて問い返し、話し手に復元してもらおうとするわけである。これも、話し手と聞き手の間に誤解や不明な点を残さず

に対話を続けていくための1つのストラテジーと言えよう。

6. おわりに

対話において頻繁に見られる省略という現象を、聞き手がどのように復元するかという観点から見てきた。話し手が省略した要素を聞き手はまず頭の中で復元するが、それを言語的形式で表出することもあれば、表出しないこともある。

2節では、聞き手が復元した要素を表出しないで頭の中にとどめておくというストラテジーについて見た。これは省略された要素が自明の場合に用いられる。聞き手は頭の中で省略を復元して話し手の発話を理解したら、それに対する反応を示す。すなわち、復元した要素は言語化されず、反応が言語化されるのである。省略が文末にある場合にこのストラテジーが用いられると、先取り相づちと区別がつかなくなる。

3節では補充というストラテジーについて見た。これは聞き手が復元した要素に確信が持てる場合に用いられる。これは、話し手が省略した要素をそのまま聞き手が言語化するもので、補充された要素が正しければ、話し手の発話と聞き手の補充は無理なくつながって1つの文になる。補充によって話し手は聞き手が省略をどのように復元したかということが分かり、それが正しければ次の発話に進み、正しくなければそれを訂正する。

4節では確認というストラテジーについて見た。これは聞き手が復元した要素が正しいかどうかを確かめたい場合に用いられる。これは省略された要素を聞き手が言語化するときに、相手に反応を求めるような言語形式やイントネーションで表出するものである。したがって、話し手は聞き手の確認が正しいかどうか、正しくなければどう復元すればよいのかという反応を示さなければならない。

5節では疑問詞で問い返すというストラテジーについて見た。これは聞き手が省略された要素を復元できない場合に用いられる。省略した部分を聞き手が疑問詞に置きかえて問い返すと、話し手は聞き手が省略を復元することができなかったということが分かり、省略した要素をあらためて追加する。

このように、省略を復元するストラテジーには、復元は頭の中だけで行って表出せず反応を表出する方法、話し手が言い通りに復元して言語形式で表出する補充、復元が正しいかどうかを確かめる確認、復元できなくてその部分を疑

問詞に置きかえて問う疑問詞化というような方法が見られる。

聞き手がこれらのストラテジーを用いて省略を復元すると、それによって話し手は省略に対する聞き手の理解を判断することができる。そして、聞き手がどのように復元したかによって次の対応ができる。聞き手の復元は聞き手の理解を示し、それによって話し手は聞き手の理解に応じた対応ができるのである。これは、ちょうど対話における相づちの機能である。相づちを広義にとらえるとすれば、本稿で見てきた省略の復元のためのストラテジーはどれも相づちの一種と考えることができる。また、相づちを狭義にとらえても、どれも相づちの延長線上にあるものと考えられる。すなわち、聞き手による省略の復元は、相づちと同じように対話を円滑に進めていくための重要な役割を果たしていると言えよう。

注

- (1) 先取り相づちに関しては、堀口(1990)の3～7ページに詳しい記述がある。
- (2) 先取り発話に関しては、堀口(1990)の7～13ページに詳しい記述がある。

本稿で使用した例文は、次のラジオ番組またはテレビ番組から取ったものである。本文中では、略称で示してある。

- (1) 徹子1：『徹子の部屋』(テレビ朝日 1987年5月8日)
- (2) 徹子2：『徹子の部屋』(テレビ朝日 1987年5月12日)
- (3) 仲間：『すばらしき仲間』(TBSテレビ 1987年5月17日)
- (4) 教育1：『子供と教育電話相談』(NHKラジオ 1987年5月8日)
- (5) 教育2：『子供と教育電話相談』(NHKラジオ 1987年5月12日)
- (6) 教育3：『子供と教育電話相談』(NHKラジオ 1987年5月14日)
- (7) 波：『全国自然情報 波の話』(NHKラジオ 1987年6月3日)
- (8) スポーツ：『スポーツ情報』(NHKラジオ 1987年6月6日)
- (9) 子供相談：『子供恐竜電話相談』(NHKラジオ 1990年5月4日)
- (10) プロ野球：『スポーツニュース』(テレビ朝日 1990年5月3日)

〔参考文献〕

- (1) 鮎澤 孝子「話しことば」の特徴—聴解指導のために—『日本語教育』64号 1988
- (2) 大石初太郎『話しことば論』秀英出版 1971
- (3) 尾上 圭介「日本語の深層—省略表現の理解」『言語』2—2 1973
- (4) 久野 暉『談話の文法』大修館 1978
- (5) 竹蓋 幸生『ヒアリングの行動科学』研究社出版 1984
- (6) 筒井 通雄「日本語の談話分析(8)「ハ」の省略」『言語』13—5 1984
- (7) 橋内 武「会話のしくみを探る」『日本語学』第七卷第三号 1988
- (8) 嶋 弘巳「文とは何か—主題の省略とその働き」『日本語教育』41号 1980

- (9) 堀口 純子「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号 1988
- (10) 堀口 純子「コミュニケーションにおける聞き手による予測の型」『文藝言語研究 言語編』17 1990
- (11) 水谷 信子「あいづちと応答」『話しことばの表現』筑摩書房 1983
- (12) 水谷 信子「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻 言語学編』三省堂 1984
- (13) 水谷 信子「あいづち論」『日本語学』第七卷第十三号 1988
- (14) 森岡 健二「ことばの省エネルギー—伝達論からみた省略」『言語生活』339 1980
- (15) 矢野 安剛「談話における名詞句の省略について」『日本語教育』43号 1981
- (16) 山岡 政紀「省略における言語外情報の伝達」『日本語教育』67号 1989
- (17) 吉川千鶴子「場面のスクリプトと省略現象」『日本語学』第七卷第三号 1988